私は言祝(ことほぎ)の神子らしい

※ただし監禁中

登場人物紹介
スヴァトスラフ
五聖教の本司教。最年少で現在の地位にのぼり詰めた天才らしいが……
ロシータ
ベロニカと共にトモエの世話をする侍女。親しみやすい性格をしている。
ベロニカ
トモエが監禁されていた屋敷の侍女。クールで忠誠心が強い。
ミュシオス
五聖教のトップである教皇。穏やかで、懐の深いおじいちゃん。
アマンシオ
カレスティア王国の国王。イサークの幼馴染である、爽やかな美形。
イサーク
カレスティア王国の天聖騎士団団長。囚われのトモエが助けを求めた人物で、英雄と呼ばれるほどの強さを持つ。見た目も声もトモエ好みな男前。
トモエ（奏宮巴）
突然異世界にトリップし、とある貴族に監禁されてしまった二十五歳。名前を呼んだ者に祝福を与える「言祝の力」が使える。誰よりも平穏を愛するがゆえ、そのための努力は惜しまない。

第一章

唐突だけど、宣言したい。私、奏宮巴（かなみやともえ）の好きな言葉は『平穏』だ。

安穏とか平和とか安らかとか穏やかとか、そんなような言葉が全般的に好き。私自身はことさらおっとりのんびりした人間でもないけど、とにかく揉め事の類（たぐい）は嫌い。

理由は単純明快、面倒だから。人の和がどうのこうの言う前に、とにかく面倒なのが大嫌いなだけ。

私をよく知る友達は、私のことを平和主義者ではなく、事なかれ主義者と言う。

面倒が起こらないために全力で努力する私は間違いなく平和主義者なのに、認めてもらえなかった。

やたら厚い面（つら）の皮と強靭（きょうじん）なメンタルで、倫理的にセーフかつ自分に害が及ばなければ何が起きても全スルー。だから、紛（まぎ）うことなき事なかれ主義者なのだと、女子会でそう決定されてしまった。

そんな、事なかれ主義者の私でも——そろそろ限界がやってきている。

「神子様、この矮小（わいしょう）なデシデリオ・メンデス・ダボにどうか、お慈悲（じひ）を」

仰々しい椅子に座った私の前に跪くのは、見知らぬおっさん。
そのむしられたかと思うくらい寂しげな頭頂部を賑やかにするよう、慈悲でも与えればいいんだろうか。
そんなことを考えている私の耳元に、生温かい息が吹きかかる。何度やられても鳥肌が立つ気持ち悪さだけど、慣れはした。
「神子様、デシデリオ・メンデス・ダボは西方での商売の成功を祈っております。何卒、デシデリオ・メンデス・ダボの悲願に祝福を」
ねっとりとした声が耳に直接吹き込まれる。
わかったから、その息も、人の名前を覚えさせようと連呼するのも、やけに近いこの距離も本当にやめてほしい。気持ち悪いし、落ち着かないし、妙に甘ったるい煙草の臭いがきつい。
ちらりと隣に視線をやると、くすんだ桃色の瞳が蛇みたくゆるく細まった。
棒のように細長く不健康そうな体の上に鎮座する、まるで重度の寝不足アル中かと思う程の顔。この蛇男、暗闇で遭遇したら悲鳴を上げて顔面を殴ってしまうくらいの悪人臭がする。
こんなのが私の〝庇護者〟だと言うんだから、本当にどうにかしている。
「――デシデリオ・メンデス・ダボ。そなたの西方での商売の成功を祈る」
厳かに聞こえるよう、吐息混じりに求められたままの言葉を吐く。
そうしてから、軽く掲げた右手をくるりと返すと――
「おお、なんと……」

おっさんの頭頂部を更に際立たせるようにして、銀色の粒子がきらきらしい光となって舞う。
吹き抜けからの光しか差し込まないこの密室で繰り広げられているのは、とても幻想的かつ神秘的な光景だ。光に包まれているのがおっさんでなければ、だけど。
右手から血の気が引いていくように、ゆっくりと体の力が抜ける。
〝これ〟をやるといつもそうだ。体力的なものより、精神的なものが大きい疲労。耐えられない程ではないけど、ぐったりしたくなるような部類のものだ。
ただ、それを顔に出すことはしない。訴えたからと言ってどうにもならないし、そんなアピールをすること自体が面倒だ。
「美しい……清らかでたおやかなお姿でありながら、これ程の神力を容易く行使されるのですか。さすが、伝説の言祝……」
感動に震えるおっさんの声を無視して、私は目を閉じる。
これで、私の仕事は終わりだ。また少しの間は平穏でいられる。
「ダボ殿。神子様はお疲れのご様子。後は場所を移そうではないか」
心得たように、いや、本当は通じ合いたくもないけど、蛇男がおっさんに退室を促す。興奮しているおっさんを宥めるようなねっとりとした声は、相変わらず気持ちが悪い。
「ええ、ええ！　神子様の御業、しかとこの身に。ああ閣下、あの件に関してはお任せください。このご恩、デシデリオ・メンデス・ダボは決して忘れませぬぞ」
「はは、ダボ殿がそう言ってくれるなら、我が家はより一層安泰だ――神子様、すぐに侍女を遣わ

せますので、しばしお待ちを」
ひどく上機嫌な声を上げる蛇男。
苛立ちを抑えながら、私はいつものように問いかける。
「私が、帰ることはできないのか」
意識して作られた、やや尊大な口調。ほぼ吐息になってしまった呟きも、静かな部屋なら簡単に拾える。
ややあってから密やかな笑い声がした。それが失笑に聞こえるのは、私の妄想なんかじゃない。
「ご安心を。天から遣わされた神子様は、生涯私の手でお守りいたします」
ひどく柔らかく紡がれたその台詞は、まるで穏やかな死刑宣告のよう。
それ以上言葉もなく、扉が閉まる音を最後に静寂が訪れる。数瞬の後、私はようやく目を開けた。
吹き抜けからどうにか届く、昼下がりの光。それでも薄暗い室内は、どこもかしこも白い。
床も壁も石で作られた無機質な空間には家具なんてほとんどなく、見える範囲にあるのはこの椅子だけだ。つるりとした木で組まれ装飾が施されたこれは、背もたれが無駄に高く造りもやたら大きい。
寒々しい程に生活感が排除された部屋だ。薄絹をふんだんに使って仕切られた奥には、もう少しマシな生活空間があるけれど。
「……っはぁぁ……」
思いっきり息をついて、椅子からお尻が滑り落ちるくらい脱力する。

「……いつまで、こんなことすればいいんだろう」
私は平穏が好きだ。自分が何かに巻き込まれるのが嫌いだ。
なのに、どうしてこんなことになっているんだろう。
私がこの部屋に、この国に――この世界にやってきてから、私の大好きな平穏は遠ざかってしまった。

× × ×

簡潔に言えば、私は〝落ちた〟んだろう。
平穏を大事にしながら流されるように学生生活を送り、適当な短大を出て、そのままバイトをしていた雑貨屋の副店長になった私。
二十五歳になっても結婚なんてピンとこなくて、自然消滅した元彼を最後におひとりさま歴三年を迎えたばかりだ。安月給かつ人間関係の微妙な職場で毎日を過ごしていた、そんなある日のことだった。
いつも通り仕事を終え、ひとり暮らしのアパートに帰り玄関を開けたら、落ちた。
何かのお笑い番組かドッキリのように、床がなくなって、何の抵抗もなく下へ下へと――
いくら落ちても終点がない闇の中。もう自分が止まっているのか、動いているのかもわからないくらい視界が黒一色だ。そんな時間感覚すら狂う空間で、社会に出てまだ数年の小娘が冷静になれ

るはずもなかった。
数年、いや十数年ぶりにガチ泣きした。絶叫した。むしろよくおかしくならなかったと自分を褒めたいと思う程、恐ろしかった。
そして、気を失った私が目を覚ましたのはこの部屋だった。
無駄に大きく、豪奢な天蓋付きベッドの寝心地を確かめる余裕はなかった。
平穏を愛するが故に多少のことでは動じない私でも、完全に許容範囲を超えていたのだ。さすがに自分の身に起こっている超常現象まではスルーできない。
何をしたらいいのかも、声を上げていいのかもわからない。そんなところに悠々と現れたのが、あの蛇男だ。
『あなた様は天上世界から降りてこられたのですね。私には一目でわかりました。今まで会ったどの聖職者より、遥かに神々しいそのお姿。あなた様はまさしく言祝の神子様！』
大仰な身振りで説明する男は、この上なく胡散臭かった。
『この世界には伝説があります。数百年に一度、天の裂け目からこの世界――クラウィゼルスに祝福を降らせる尊い存在が顕現すると。その存在は〝神の雫〟という絶大な力を祝福に変え、名を呼んだ者にそれを与える。人々を言祝ぐ存在、だから言祝の神子と呼ばれるのです』
悪人面に精一杯の笑みを浮かべ、熱に浮かされたように声を張るその姿に、鳥肌が立った。
『人違い？　いいえ、あなた様は神子様でございます。神々しいお姿だけではなく、言祝の神子の証である聖石と聖痕を御身に宿しているのですから。ああ、あなた様がこのカレスティア王国に降

臨し、私がいち早く馳せ参じることができてよかった。もしよからぬことを企む輩に見つかっていたらと思うと……ぞっといたします』
ぞっとするのは私の方だ、と言える精神状態ではなかったのは、おそらく幸運だったんだろう。
『神子様、これからはこの私が御身をお守りいたします。何も心配召されることはございません。今後の生活も、言祝の儀式についても、全て私にお任せください』
どう贔屓目に見ても、目の前の男は〝よからぬことを企む輩〟にしか見えなかった。顔つきとか目つきとかそんな表面的なものではなく、面倒事を回避する能力に長けている私の勘がそう判断した。
この男は信用できない。私を守ると言っておきながら、ひどく薄っぺらな言葉を吐き続ける男を信用しろという方が無理だ。
だけど、私は蛇男を拒むことができなかった。
いくらなんでも現実と妄想の区別くらいつく。間違いなく自分に降りかかっている現実から、逃避なんかできるはずもなかった。こんな、いっそ笑える程のファンタジー的展開だとしても、だ。
そう、ファンタジー。目の前の男を総評するならその一言に尽きた。
まず色彩がすごい。髪と瞳が共にくすんだ桃色。格好も中世ヨーロッパをベースにしたような本格派コスプレ衣装。しかもどう見ても外国人なのに、ものすごく流暢に日本語を喋っている。極めつきに、手元から何気なく火を生み出して燭台に灯す。まるで魔法のようなことまでしてしまう人間を、ファンタジー以外の何と表現すればいいんだ。

更に驚くべきは、自分の外見も変わってしまっていたことだった。
と言っても、丸々変わってしまった訳ではない。内面とのギャップがひどいと言われる清楚系な顔の造作と、結構スタイルがいいと自負している体型は元のままだ。
でも色彩が激変、というかまたファンタジーなことになっていた。
穏やかそうだと言われる黒目がちの瞳は、まるで枯梗のような青紫色へ。伸ばすに任せた背中を覆う長い黒髪なんて、どんな染料を使えばこうなるのかわからない綺麗な薄紫色だ。
元からこうなんだ、意外に似合うじゃないか、と毎日数回は鏡の中の自分に語りかけないとやっていけそうもなかった。
そして蛇男の言う通り、聖石と聖痕らしきものもしっかりあった。鎖骨の間にできたホワイトオパールに似た遊色の宝石が聖石で、そこから肩にかけて優雅に広がる銀色の刺青みたいなものが聖痕のようだ。とても中学二年生あたりが好きそうな代物だと思う。
何度もしつこいけど、全てが全て、とてつもないファンタジーだった。
ただの小市民が神子なんて大それた肩書きを背負わされるとか、何の冗談だ。
そう言おうとした私に、蛇男はわざわざ古めかしい本を読み聞かせながら説明してくれた。
このクラウィゼルスという世界の一大宗教らしい五聖教が伝える、聖典の一節――そこで、神子の存在が語られている。そして、この世界についても。
どうやら私の元いた世界はこのクラウィゼルスの上にあるらしい。クラウィゼルスを創った神々も、元は私の世界の出身のようだ。

私の世界の人間が別世界を創造する術を持っているなんて、当然ながら聞いたことがない。それでも聖石を得るのは同じ天上世界の人である証拠だと蛇男が息巻いていたので、その場では納得しておいた。真剣なツッコミを入れるべきではなさそうなので。
まぁとりあえず、その神々と同じ世界から落ちてきた私は、神力と呼ばれる天上世界から降ってきた力を祝福という形で使えるらしい。
外見の変化と、今までなかった不思議な力。それをよくよく噛み砕いて、何とか自分がその神子なのだと納得させた。
私の頭は、これが現実だと言っている。だとしたら、私の中の常識や知識など何も通用しないだろう。そんな状況で下手に逆らったりすっとぼけたりしても、何の利益もない。むしろ害にしかならないと思う。
色々と打ちのめされて、落ち着いてを繰り返した結果、私は蛇男に庇護されることにした。
私は平穏が好きなんだ。むやみに事を荒立てて事態を悪化させる真似はしない。現状もかなりひどいけど、もうこれ以上の問題は抱えきれない。よって現状維持。そう判断してのことだった。
ただ、ひとつだけ……素直に従えないことがあった。
『私は、帰れないの？』
『残念ながら、言祝の神子が天上世界に戻られた記録はございません』
残念だと微塵も思っていない蛇男の薄笑いに、哀しみより苛立ちが勝った。
本当なら、怒鳴りつけて泣き喚きたかった。あっさりと断ち切られた私の全てを馬鹿にするよう

なその口を、縫い付けてやりたかった。
そこで私が声を荒らげなかったのは、今は下手に出ているこの男を刺激して態度が豹変してしまったら困ると思ったからだ。
何より、信用ならない人間の言葉なので、もしかしたら元の世界に帰れるかもしれない。そう思って、何とか自分を落ち着けることができた。
『何もご心配なさらずとも、これからは全て私にお任せを』
ひどく満足げな蛇男への精一杯の反抗は、ただその言葉を無視することだけだった。
確かに、蛇男は私に安定の生活を与えてくれた。バストイレ付きのこの部屋と、坪庭のように周りを囲まれた中庭。その中であれば、私はまさしくお姫様待遇を受けられる。
ただ、この生活はとても歪だ。
御身を守るためとかのたまって、事実上監禁されていること。何人かいる侍女達が揃って能面対応で、会話ひとつ成立しないこと。世界に祝福を与えるとか仰々しいことを言っておきながら、その相手がどいつもこいつも目が濁って腹が黒そうなこと。教えられる知識の中で、政治・歴史・時事に関することは総スルーされていること。蛇男が決して自分の名前を教えないこと。
ぱっと挙げられるだけでもこれだけの歪さを持つこの生活が、平穏だと言えるだろうか。
「ハッ……」
言える訳がない。問題あり過ぎだろうが。もう鼻で笑うしかない。
事なかれ主義、大いに結構。だけど、さすがにそろそろ限界だ。

私がクラウィゼルスに落ちて、体感的には半年以上一年未満。長いようで短いこの期間で、嫌という程わかった。神経がゴリゴリすり減っていく、平穏に見せかけた不穏の中では生きていけない。
最初は自分の心の安定を保つのに精一杯だったけれど、ようやく少しだけ先を考える余裕ができた。
ここにはいられない。このままだと私は一生搾取される。蛇男のいいように扱われ、大事に飼われて、この白い豪奢な牢屋で生涯、蛇男の幸せに繋がる道を言祝ぐ。
反吐が出そうな人生プランだ。私の平穏はどこにいったんだか。
「――失礼いたします。神子様」
一応のノックの後、どうぞ、と言う前に扉が開けられる。
私のプライバシーはないのか……まぁ、ないんだろう。蛇男にとって私は尊い存在ではなく、大事な金の卵なんだから。
「お召し替えのお手伝いに参りました」
入ってきたのは、数人いる侍女のうちのふたりだった。
ひとりは藍色の髪をきっちりとまとめた、やや色白でクールな雰囲気の美女。もうひとりはゆるく波打つ緑色の髪をざっくりとボブカットにした、きつそうな猫目が特徴の勝気な美女だ。
どちらも長身で、おそらく百七十センチは超えているだろう。海外のモデル、と言っても充分通用しそうだ。
この美女達は、他の人より私の身の回りの世話をする率が高い。シフトのようなものがあっても、

基本的にはこのふたりが私付きなんだろう。
儀式用だという、胸元と背中がばっくり開いたエロい薄絹みたいな白い衣装を脱がされる。代わりにもう少し厚手の白い布がギリシャ神話の女神のように巻かれ、やや簡素な銀のベルトで留められる。
その間、侍女達はずっと無言無表情。下着姿になろうが、禊や入浴で裸になろうが能面顔は崩れない。せっかく皆美女なのに、仏頂面で台無しだ。
「ありがとう」
もう染みついてしまった、吐息混じりの静かな声でそう言っても、返ってくるのは必ず無言。
別に期待はしていない。蛇男にそう指示されているだろうから。
侍女達が礼をして下がっていく。無表情ながらもどこか沈んだように見えるのは、私の幻覚なんだろうか。
それを横目にしつつ、私は彼女達が無言でいなければならない意味を考える。仮説の域を出ないけれど、十中八九、当たりだろう。
会話を重ねることで情を移さないように。私が余計な知識を得ないように。それももちろんあるんだろうけど、一番の理由は――
「名前を知られてはいけないから、か……」
名を呼ぶことで祝福を与えるというのは大体合っているはずだ。確かに私が今まで祝福した相手は、全員願い通りに事が運んでいるらしい。そのことは蛇男にもういいと怒鳴りたい程に聞かされている。
それなら、どうして蛇男自身は祝福を求めないんだろうか。
蛇男は曲がりなりにも私の生活を保障してくれている。平穏のために祝福のひとつやふたつくらいしなくてはいけないと思っていた。だけど、そんな話は一度もされたことがない。
それなら、祝福をされることには何らかのリスクがある。そう考えるのが自然だ。
「私も、そこまで馬鹿じゃないんだけどね」
私の耳元で、毎回囁く蛇男。しつこいくらいに「この者はこう祈っているから、祝福を」と。
名前と、願い。祝福は基本的にそれがセットになっている。
蛇男による言祝の力の検証によって、名前を言わずにその人を表す言葉――例えば〝この屋敷の執事の男性〟とすると力はだいぶ弱くなり、些細な願いしか叶えられないということが判明している。だからこそ、名前は必要だ。
一方、願いの内容は検証しなかった。五聖教の伝承に書かれている通り、神の雫を求める人間の願いを、神子が一言一句違わず口にしないと叶えられないとまで言い切った蛇男の目は、いつも以上に濁っていた。もちろん実際にその伝承を読ませてくれたことなどない。
そこから考えるに、私が別のことを口にするのは余程都合が悪いんだろう。
「……私が名前を呼んだ人間の願いは、相手の希望じゃなく、私が口にしたことだけが叶う」
数多くの相手を祝福してきた。何度も何度も、儀式をやった。薄汚れた欲望を丁寧に隠して、綺麗に取り繕った言葉を私に吐かせた人だって多くいる。

だからこの仮説は、私の中では限りなく正解に近い。
では、何故蛇男は私に対してこんな方法を取るのか。
この世界では、私は相当幼く見えるらしい。蛇男は、まるで子どもを洗脳するように私を教育している。これが神子の正しい在り方なのだと信じ込ませようとしている。
残念でした。いくら従順そうに見えても、騙しやすい年齢の子どもに見えても、冷静に考えることができる二十五歳の大人なんだよ。
「でもねぇ……」
この仮説が合っているからといって、どうなるものでもないんだ。私は蛇男どころか、この屋敷にいる人間全員の名前を知らない。今まで祝福した相手の名前なんて大して覚えていないし、覚えていたとしても、遠くにいる人に祝福をしたことがないからどうなるかもわからない。
大体、何を願えというんだ。私に欲望を叶えてもらいに来たおっさん達に、「私を助けて」とでもお願いしろと？
皆、蛇男に祝福された恩がある。下手に蛇男に逆らえば、不利な祝福を与えられることも有り得ると考えている人もいるかもしれない。
蛇男曰く、祝福は人の死に直接関わることは願えないらしい。当然だろう、そんなのは間違っても祝福なんて呼ばない。逆に言うと、言葉を選べば死以外の不幸は願える――もちろん、あのおっさん達の不幸も。私という存在がある限り、おっさん達が蛇男を裏切ることはないはずだ。
「こんなところで監禁されて一生を終えるなんて、冗談じゃない……」

絶対に嫌だ。こんな脆い平穏なんかじゃない、本当の平穏を手に入れるまで、私は諦めるつもりなんてない。
元の世界に帰れるのか、それとも本当に一生この世界にいなければならないのか。
当然そこは気になるけど……知識を持たない現状では、この場からの脱出を最優先で考えるべきだ。そもそもここを出ない限り、私の未来にはその二択すら浮かんでこない。
「脱出、脱出……かぁ」
面倒事を回避するための努力は大好きだ。その後に待っている平穏が更に恋しくなる。
やっぱり、私は事なかれ主義者じゃないだろう。流されるところは適当に流されても、自分基準でかなり努力をすることもある。努力型平和主義者とでも名付けておこうか。
とにかく面倒事を回避したい。ひとまずでもいいから、心からの平穏を手に入れたい。今はそのために動くべきだ。
ただ……どう努力をしようか、見当もつかないんだけど。
「誰か、せめて名前を教えて」
私を助けてくれる人の、名前を。
できれば蛇男とは対照的な感じの人がいい。もうあの血色の悪い悪人面は見飽きた。健康的で長身マッチョでおおらかで男らしい人が見たい。そういう人に助けてもらいたいものだ。
友達も言っていた気がする。「異世界トリップはイケメン逆ハーが基本」だと。逆ハーレムなんて面倒なことは絶対嫌だけど、イケメンは嫌いじゃない。むしろ好きだ。まぁ、私のタイプはハリ

ウッドのアクションスターのような男前だけど。
空想上のイケメンに想いを馳せながら、私は唯一許されている中庭への散歩に向かった。

× × ×

「ヒル・モンタネール・コンバロ。そなたの後継が次男になることを祈る――」
毎度お馴染み、掲げた右手から生まれた銀の光が、跪いたおっさんに降りかかる。
今日のおっさんはここ最近で一番ごつい。まさしく筋肉達磨といった風体だ。
ただゴツければいいという訳ではないので目の保養にもならないし、やたらと驚いて恍惚とするお馴染みのパターンにも飽きた。蛇男の息が生温かくて気持ち悪いのも、いい加減どうにかならないだろうか。
「――では、神子様。ごゆるりとお休みください」
興奮して話しかけてくるおっさんを従えて、満足そうに蛇男が目を細める。
ああ、本当に蛇のようだ。背中がぞわりとする。
目を閉じてその不快感を隠し、ふたりの男がいなくなるのを待つ。
いつもと同様に扉が閉まる音を聞き届ける。今日はもう、帰れるかどうかの問いかけもしなかった。
部屋から完全に人の気配が消えたのを確認して、目を開ける。そして椅子から降りて、陽が降り

注ぐ中庭へ続く窓を開け放った。
そこにあるのはそれなりに広く、白い壁に囲まれた庭。白い石が所々に敷かれ、その硬質な印象を消すように柔らかな曲線を描きながら花々が植えられている。
庭の端には私の両手で抱えるよりも太い幹の木と、頼りない若木が一本ずつ生えていた。天気のいい日には、その大木の下に侍女が絨毯といくつかのクッションを敷いておいてくれる。最近はそこがお気に入りのだらだらスポットだ。
部屋履きなのかもよくわからないサンダルでそのまま庭に降り、木陰にあるそのスポットに一直線。そして倒れ込むようにして、沈み込む柔らかさのクッションに埋もれる。
最近、祝福をする頻度が増えている気がする。
そのせいだろうか、疲れが抜けない。精神的な疲れが完全に体に出てきてしまっている。意識して外に出てはいるものの、そのうち部屋に籠りきりになってしまいそうだ。
「ただの飼い殺しの方がマシだわ……」
そんなにこき使わなくてもいいじゃないか。もっとだらだらさせてくれ。
力の行使が疲れるものだということくらい、私の様子を見ればわかるはずなのに。
金の卵は人間ではないから、人権がないんだろうか。そもそもこの世界に人権なんて言葉はあるんだろうか。
このまま使い潰されてしまうのなんて嫌だ。潰すぎりぎりで生かされるのは、それ以上に嫌だけど。何にしても、つらい。

クッションのひとつを抱くようにして、体を小さく丸めて大きく息をつく。
中庭にしては大きいけど、高い塀で囲まれたこの空間は閉鎖的だ。出入りできるのは私の部屋からのみなので、逃亡の心配はないと思われているんだろう。確かにこの塀を瞬時に登る術は私にはない。
また溜め息をついて、目を閉じる。侍女が入ってくるまでの少しの間だけでも休ませてほしい。このエロい衣装にも慣れてしまったので、別にしばらく着替えられなくても構わない。
そう思いながら大きく息をついて、体を丸める。本格的に寝たふり体勢を作っていると、扉が開く音が小さく響いた。
「……神子様？」
「静かに……眠っていらっしゃるわ。お疲れなのよ」
どうやらぎりぎりのタイミングで寝たふりが成功したみたいだ。しかし、私のいるところで侍女同士が会話をしているなんて珍しい。
いつものふたりだろうか。薄く目を開けて確認すると、庭に降りてくるのはそれぞれ藍色と緑色の髪をした美女達だった。寝たふりが堂に入っているせいだろうか、ふたりは私を起こそうとせず、様子を窺っているようだ。
「ベッドにお運びする？　神子様は少女のように小柄だし、私にもできるわよ」
「いいえ。せっかくお休みになっているのだから、もう少しこのままの方がいいわ」
声を潜めてはいても、中庭はとても静かなのできちんと聞こえる。

話の内容からして、どうやら私は嫌われてはいないらしい。そもそも好き嫌いを決められるような交流をしていないんだけど。
「神子様、また少しお痩せになったんじゃない？　元々すごく華奢な御方だったけど……」
「ええ、腕や腰回りが細くなったみたいね。元のお美しさに陰りはないけれど、あまりに儚げで心配だわ……それにお顔の色も優れない。ああ、ミルク色の滑らかなお肌だったのに、まるで蝋のよう。長く艶やかな御髪も少し傷んでいるわ」
「料理長に言っておきましょ。神子様は果物だったら多く召し上がって下さるはずだわ」
どうやら侍女達は幻覚ではなく、本当に私のことを気遣ってくれるいい人達のようだ。私をいちいちヨイショしているような気がするけど、それは置いておこう。
ちなみに侍女達は揃って長身美女だと思っていたのだが、会話を聞く限り私が小さいだけみたいだ。これでも日本人女性の平均身長くらいはあるのに。
侍女達の囁くような会話は続く。疲れているし、まだ寝たふりのままでいいかな。
「――ねぇ、今日のお客様、見た？　広間で大笑いしてたわよ、ついに儂の時代が来るって」
「聞かなかったふりをなさいな。私達はそうでないといけないの」
「そう、だけど……旦那様の対応からして格上の、それもどうやら他国の方みたいだったの。おかしいわよ、絶対。神子様をまるで物のように扱って、次々と悪巧みを――」
「それ以上は駄目よ！　誰が聞いているかわからないわ」
「今日の当番は私とあなたじゃない。大丈夫よ。今の時間は兵も少し遠ざけてあるし」

蛇男のことだろう〝旦那様〟のことは、ふたりも好んではいないらしい。嫌々仕えているのが言葉の端々からわかる。

私が疲れ切った顔をしているので、起きないと思っているんだろうか。大いに結構。このままどんどん話してくれ。

「いいこと？　旦那様の耳に入って変な勘繰りでもされたら、間違いなく私達は地下牢行きよ。家だって無事では済まない。屋敷に仕える時に誓約させられたのを忘れたの？」

「わかってるわよ。私だって誓約を破って喉を焼かれたくないわ。あんなもの、家のことさえなければ絶対誓わなかったのに……」

「……それは、皆同じよ。私達は来たくてこの屋敷に来た訳ではないわ」

藍色の髪の侍女が、声を抑えつつ吐き捨てるようにそう言った。

「全てから目を逸らして、ただ人形同然に仕える。嫌悪感で一杯よ。神子様付きになってから待遇はよくなったわ。でも、こんな畏れ多いことをしておいて、嬉しさなんて湧くはずもない」

「喜んでるのなんて執事くらいじゃない？　旦那様と顔を突き合わせて悪巧みばっか――」

「だからやめなさいってば！」

……本当に蛇男は人望がないらしい。全く可哀想だとは思わない。いい気味だ。

会話の色んな部分を拾うと、侍女達は誓約というものに縛られているのがわかる。聞いた感じだと、実家や家族に関して何かしらの弱みを握られているというところか。さすがの外道だな、蛇男。

「はぁ……せめて王都にツテでもあれば、何としても神子様がいるって伝えるのに。街の憲兵の詰

所に駆け込んでも、きっと話なんて聞いてもらえないし」

「無茶を言わないの。王都は遠いし、この街の憲兵は旦那様と懇意にしているのだから」

「ここは旦那様の国のようなものだからね……」

「そんな恐ろしいもの、想像させないでちょうだい……いいえ、言祝の神子様を所有物化している時点で、何よりも恐ろしいわね。馬鹿なことを言ったわ」

中央の目が届きにくい場所は、悪徳貴族の手で腐りやすいのがファンタジーのセオリーだ。

侍女の溜め息が重い。誓約に縛られている彼女達が、何かしらの行動を起こすなんて無理だろう。

私はあなた達が思っているよりもメンタル強靭だから、そんなに考え過ぎないでいいよ。

そんなことを言えるはずもなく、〝全員投獄〟やら〝磔刑〟やら物騒な単語を交えた会話をぼんやりと聞く。すると、緑髪の侍女らしき声が唸り出した。

「あぁー、何でよりによって神子様を保護したのが旦那様なの！　もう、ほんっと嫌！」

「ちょっと、静かになさい！」

「あ、ごめん……でも、本当に嫌なのよ、悪い奴ばっかりに祝福が与えられるなんて。神子様の祝福は天将軍とか地将軍とか、それこそ国王陛下に与えられるべきなのに。ううん、カレスティアだけじゃなくて世界中に与えられるべきものだわ」

「そうね。伝承ではその通りよ。私だって決してこのままでいいとは思っていないわ。でも……こんな遥か遠くからでは、私達の声なんて届かないのよ」

……何か今、とても重要そうな情報が出てきた。天将軍、地将軍、国王陛下。聞く限り国の重鎮

だろう。国王なんてトップだし。
侍女達の声は届かなくても、私は？　祝福なんて、目の前にいる相手にしかしたことがない。だけど、私は蛇男曰く〝世界に祝福を与える尊い存在〟だ。それだけの力があるのなら、もしかして距離なんて関係なく、声を届けられるんじゃないだろうか。誰かの願いではなく、私の自分勝手な願いだとしても。
言え。言ってくれ。言ってください。私に教えてください。本当にお願いします。名前を知ったらあなた達にイケメンと金を降らせる祝福をプレゼントするから！　ねぇ！
「天将軍だったら、地方を視察するついでに寄ったりしてくれないかしら」
「確かに、かの方は国内外を飛び回っているけど、ね。もしそんな奇跡があったら、あなたが次のお給金で買う予定のワンピースを買ってあげてもいいわ。どうせ買い物くらいしか気を晴らす手段がないし」
「言ったわね！　――ああ、イサーク・ガルシア・ベルリオス様。どうか囚われの美しい神子様をお救いください。そして旦那様に鉄槌を。ついで私にワンピースを！」
「本気でやらないの。あなたが祈ってもどうにもならないでしょう……ちょっと、もうさすがに時間がまずいわ。神子様をお起こししないと」
「はぁ……こんな祭事の衣装みたいのじゃなくて、たまにはドレスを用意したいのに」
「旦那様はイメージばかり大事になさっていらっしゃるから仕方ないわ――神子様、神子様」
近づいてきた声に反応するように、瞼をほんの少しだけ動かす。表情はぼんやりと、隙を多く。

そして焦点をしばらくずらした後、侍女達へと合わせる。
完全な寝起きそのもの。私は今までこの寝たふりを見破られたことはないんだ。
「神子様、お休みのところ申し訳ございません。お召し替えのお時間にございます」
藍色の髪の侍女が抑揚のない声でそう言う。素晴らしいまでの能面対応だ。
情報をありがとう。あなた達は必ず助けると誓おう。多分あと三人いる他の侍女もだ。それと料理長や良心のある使用人達も。
イサーク・ガルシア・ベルリオス――私を助ける、いや強制的に助けさせる人の名前。
もうイケメンとかどうでもいい。天将軍とか強そうだからそれだけでいいんだ。囚われている自称そこそこ美人の私を救ってくれ。

×　×　×

朝起きて、仕度をして、食事をとって、読書をして、儀式をして、クッションに埋もれて。
「イサーク・ガルシア・ベルリオス。私を助けて」
日課となった祝福を、できるだけ遠くに飛ばすようにイメージして手を振る。
侍女達のお喋りからはや一週間。私は一日二回、誰の目もなくなる転寝の時間と就寝前、きっちり天将軍を祝福している。超小声で。
これが届いているのかどうかはわからないけど、今の私にできることはそれしかない。

「イサーク、私を助けてくれたら超絶好みの女の子と出会えるようにするから、絶対助けてね」
神の力を使った祝福なんだからきっと叶うはずだ。もう妻子持ちだったらごめん。その場合は目の保養になる人と出会えるよう祈っておく。
俗物過ぎる祈りでも、銀の光は舞う。今のは特に祝福しようとは思ってなかったんだけど……まぁいいか。
不真面目な内容でも何でも、とにかく助けてくれと願いながら両手で光を押し上げる。
届け。私の呪い、もとい祝福。
「イサーク、イサーク・ガルシア・ベルリオス」
小さく、吐息混じりに名前を呼ぶ。まるで恋人に甘えるみたいな響きになってしまって、ややげんなりする。まるで恋煩いでもしているようだ。
今だったら天将軍が超ド級のブサメンでも、激しくチビデブハゲでも、とんでもなく体臭がきつくても恋に落ちる自信がある。
祝福を与えられるにふさわしく、国の要職に就いている程の人物なら、きっと性格だってここに来るおっさんよりずっとまともなはずだ。惚れる。助けに来てくれたら、だけど。
クッションの上をずりあがるようにして大きな幹に体を寄せ、頭を押し付ける。
自然のにおいなんて特に好きではなかったはずなのに、とても落ち着く。
この中庭も、だだっ広い部屋も、きっとものすごく贅を凝らしたものなんだろう。この待遇だって、自分の力で生活していたら絶対に味わえない。

だけど、ひと欠片も嬉しくない。ここには私が好きな平穏も、今まで当たり前だった自由もない。あるのは問題だらけな状況と、疲れ切った体だけ。
自分でもわかる。心に余裕がない。突破口になりそうな名前を知ってしまったから、尚更焦る。
何も知らない状況の方が、まだ耐えられた気がするという矛盾。それでも、名前を呼ばないなんてできなくて。
「早く私に会いに来て、イサーク」
また勝手に銀の光が舞い上がる。視線だけで遠くへと送れば、その通りに彼方へ消えて行った。
ピリ、とこめかみが痛む。もしかしたら祝福の使い過ぎかもしれない。
これだけ天将軍に祝福を送っているのに、蛇男主導で行う言祝の儀式の方がずっと疲れる。それは私の気持ちの問題か、それともおっさん達の願いが結果的に誰かを不幸にしているせいか。
私は儀式の中で、一度だって真面目に言祝いだことなんてない。むしろ監禁されている状況で真剣に悪人を祝福できたら、そいつの頭のお花畑は広大過ぎる。
「――おや、神子様。言祝の力を使われましたか」
飽きる程聞いてきた、ねっとりとした声が私の休息を奪う。
てめえに言う筋合いはねえよ。
そう口にしたらどうなるか気になるけど、ひとまず緩慢な動作で起き上がり、声の主を見据えるように視線を巡らす。
まるで自分が主人だと言わんばかりに遠慮することなく、私の憩いの場に足を踏み入れた蛇男。

儀式用だと思われる、白くゆったりとした服に細い剣を下げている姿のままだ。
珍しく祝福した相手を置いて戻ってきたらしい。何の用だろうか。たまに抜き打ちでやってくるから気が抜けなくて困る。まぁ、どうとでもなるけど。
それにしても、私が力を使ったことがよくわかったな。そう言えば、祝福をした後はしばらく力の残滓が漂うとか、前に苔色の長い髭を生やしたおっさんが騒いでいた気がする。
とはいえ、特に焦る必要はない。問いにしれっと頷いた私を見て、蛇男が目を細める。
「何を、祝福されたのですか？」
「……それ」
指差した先には瑞々しい大輪の花。図鑑で名前を知った、ソルという花だ。白の縁取りがある金のカサブランカのような派手な花で、この国の国花らしい。
天将軍に祝福を送るついでに祝福しておいた。面倒事を回避する努力の一端、カモフラージュだ。
「いやはや、これ程美しく咲くソルの花はこの庭以外ではないでしょう。さすが神子様」
私の力は有機物全てに有効らしい。それを検証したのはこの男だ。
本当に、私を使えるだけ使ってやろうという魂胆が見え見えだ。慇懃無礼を地でいっている。
「外にも祝福を向けられていたようですが、ソルの花を咲き誇らせるためにでしょうか？」
「そう。国花は至るところに植えられていると本にあったから」
「お優しいですね、神子様は。ただ、祝福は無二の力。よからぬ輩を引き寄せないためにも、あまり多用はされませぬよう」

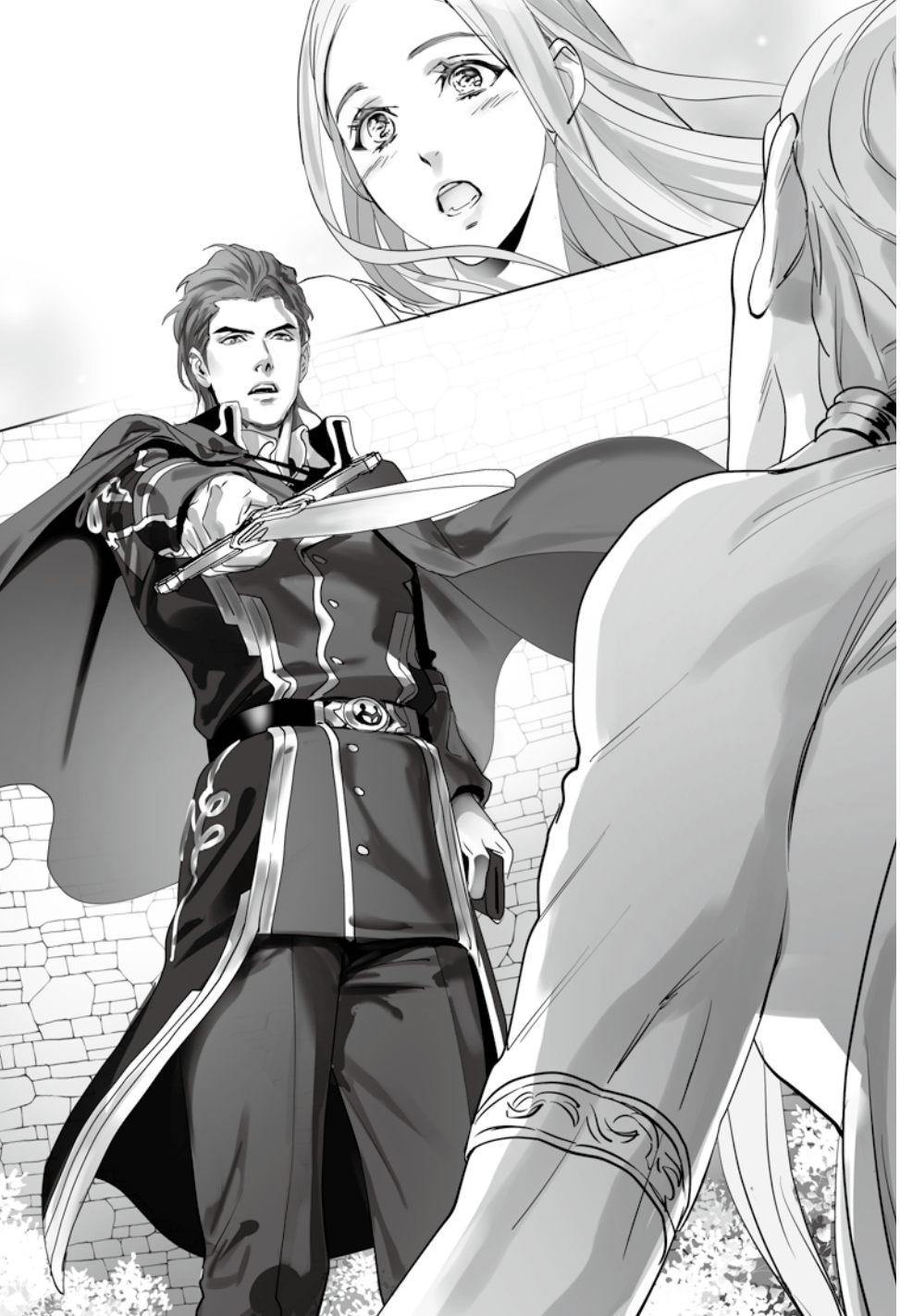
その筆頭は目の前にいるんだけどね。しかも多用どころか乱用しているし。
そんなことを思いつつ、目を伏せることで返事をして、興味を失ったように首を巡らす。またこめかみが痛んだが、軽く指で擦って紛らわす。
早くいなくなってほしい。まさか、本日二度目の言祝の儀式なんて言うんだろうか。さすがに気絶するぞ。儀式用のエロい衣装は未だに脱いでいないけど、やる気なんて毛程もないので空気を読んでほしい。
「ああ、神子様。ひとつお話があるのです」
「……何か」
「全く恐ろしいことに、最近屋敷に侵入しようとする不届き者がいるようなのです。御身の安全のため、こちらの道具をお使いください」
差し出されたものは、銀色の輪。刑事もののドラマでよく見る、アレ。
……蛇男は馬鹿なんだろうか。それとも私を心底馬鹿にしているのか、落ちてきたとか言われている天上世界を馬鹿にしているのか。
「それは？」
「腕利きの職人に作らせた、守りの魔道具でございます」
はい、ダウト。それは警護じゃなく拘束です。
やたらと豪奢な彫刻にぎらつく宝石が嵌められてる、銀でできた輪。部屋の方に繋がっていると思われる、細いチェーンがアクセントになっているそれは……紛れもなく、手枷だ。いや、輪の大

きさ的には足枷かもしれない。
「……そなたは私に枷をつけろと言うのか」
蛇男プロデュースの厳かな口調を保ったまま睨み付けると、さすがにまずいと気付いたのか蛇男が一瞬顔をしかめる。
神子を隠しつつ利用するという器用なことを半年以上続けているくせに、明らかに馬鹿な真似などしないでほしい。こんな脳タリンに監禁されているのかと思うと情けなくなる。
「そ、そのようなことは決して！　これはこの世界では一番安全な守りの魔道具なのです。神子様の世界の拘束具に類似しているとは、本当にご無礼を……」
じゃあ国王とか貴族とかお偉いさんは皆、警護のために鎖に繋がれていると。
言い訳にしてももっとマシなものはないんだろうか。まさか私のことを、そこまで騙しやすい素直な子どもとでも思っているのか。目が濁っている上に腐っているのか。
こめかみがピリピリする。どこかに行ってほしい。本当に具合が悪くなってきた。
「私はそのような物など身につけない。下がれ」
「しかし！」
こめかみどころか、頭全体が痛い。頭の中で何かがぶつかりあっているような、有り得ない痛みが連続する。
「私を犬畜生のように扱おうと言うのか」
ああ、駄目だ。言ってしまったら、もっと面倒なことになる。

「このような場所に監禁して、性根の腐った輩ばかり祝福させて――」
そう思っているのに、理性が痛みに負ける。丁寧に包んで隠していた本音がどんどん漏れていく。ずっと我慢してきたのに、駄目だ。もう。
……ふざけんな、コノヤロウ。
「更に拘束わんわんプレイとか……お前は私のご主人様にでもなったつもりかっつーんだよ!!」
そう叫んだら――空が割れた。
「……は？」
透明なガラスに似た、何かが降り注ぐ。
体に当たる前に消えていくそれを綺麗だと思った瞬間、腕を強く掴まれた。
「つまさか！」
「ちょっ、離し……！」
力加減なんて無視して、無理矢理立ち上がらされる。
顔をしかめようとも蛇男は意に介さない。というよりそんなものを気にしていない。焦点の合わない目つきで頭上を見て、悪人面を青ざめさせている。
「女、お前……何をした!?」
ああ、もう慇懃無礼はやめたのか。その方がいっそ清々するけど。

不健康そうでもさすがは成人男性。この世界では小柄な上すっかり体力も落ちた私には、為す術もない。
半ばパニックになっている蛇男に詰め寄られても、何が何だかわからないのはこっちの方だ。
「神力の供給は絶たれていないはず……自分で結界を壊したのか！　クソが！」
意味がわからない。結界なんてものが張ってあったことすら知らないのに。
呆然とする私に構わず、蛇男が部屋に引きずり込もうとする。
痛い。腕が抜ける。肩から嫌な音がする。
「やっ、いた……」
「煩いッ！　ただの人形でいれば可愛がってやったものを……！」
あ、これやばい。
血走った目を向けられて、どこか冷静にそう思った瞬間。
「――オイオイ、どういうことだ？　こりゃあ」
ガラスと共に降ってきた、深みのある低い声。呆れたような様子のそれは、力強く響いて空間を支配する。
「最上級の神聖結界とか、御大層なモン創ってんじゃねえか。オメエ、どんだけ司祭に金積んでんだよ。あーめんどくせえ。ここの神殿、燃やしちまいてえ」
軽い口調なのに、その声からはじわりと滲み出る〝何か〟を感じる。
正直言ってとんでもなく好みの低音域の声なんだけど、今はうっとりする余裕もない。

「あ、あ……」
喘ぐような気持ち悪い蛇男の声が遠い。私の意識と視線は、真っ直ぐに塀の上を越えた空へと固定されていた。
「なぁ、俺が誰かくらいわかんだろ？　子爵さんよぉ」
その男は、悠々とそこに存在していた。
大きな体躯。派手にはためく赤いマント。荒々しい印象なのに、どこか洗練されたその姿。
まるで美しい獣だ。明らかに人間の形をしているけれど、そう表現するのが一番しっくりきた。
「弁解も無駄口もいらねえ。まぁ、遺言くれえは聞いてやるぜ」
だるそうに言いながら、その人はやや癖のある赤銅色の髪を無造作に掻き上げる。何気ない仕草すら、目が離せない。声も出せない。
今考えてはいけない脳内の叫びを、必死に押し留めておくのが精一杯だ。
「な、何をおっしゃいます！　いくらあなた様でも、我が家でこのような狼藉――」
「狼藉、ねぇ……」
確かに狼藉……立派な不法侵入だ。だけど、そんなごく普通の訴えなんて、この場では何の意味もない。むしろそう主張する方が奇妙だ。
その人はちらりと私へと視線を向けて、呆れたように鼻で笑った。
「有り得ねえくらいダダ漏れの神力。それに伝承通りの聖石、聖痕。この俺が、わからねえとでも思ってんのか？」



今の台詞でわかる。この人は、私がどういう存在なのか把握したんだ。

「……やっぱ遺言もいらねえ。聞かれたことだけに答えろ」

荒らげた訳ではないその声に、蛇男が息を呑む。

深みのある声だけではなく、その大きな体躯からも溢れ出してきている〝何か〟。それはおそらく、魔力と呼ばれるものなんだろう。魔力は神力と違って元々この世界にあった力で、クラウィゼルスの人間全てが持っているらしい。今の私にも同じような力があるらしいので、何となくわかる。その力がどれだけ強く、濃いものか。

それを受けてか、カタカタと震え出した蛇男が一瞬体を弛緩させる。チャンスを逃さず、掴んでいた腕をさり気なく振り払うが、蛇男は気付かない。

それくらい、蛇男はゆっくりと下りてくる彼に全神経を集中させていた。

「かーわいい声が、ずっと呼んでんだよ。この俺を支配するくれえの力で、疲れ切った声で〝助けて〟って。気合入れて捜してみりゃ、こんな田舎の屋敷に、有り得ねえくらい分厚い結界が張り巡らされてやがる。怪しいことこの上ねえじゃねえか」

着崩した黒い軍服に包まれた腕に、いつの間にか握られている豪奢な剣。

何気ない動作で振り上げられたその切っ先は、数メートル離れた蛇男の喉元へと向けられていた。

「――カレスティア国王陛下より剣を賜った天聖騎士団団長、イサーク・ガルシア・ベルリオスが問う」

張り上げた訳でもなく、響く声。震える蛇男を見据える切れ長の目は、何よりも鋭い。
「子爵ガスパル・ネグロン・ドミンケス。貴様が隠蔽していたこの者は、何者か。この者を拘束しようとしているのは、いかなる理由か」
支配される。突如現れた闖入者に、私が助けを求めた存在に。
「十秒やる。俺を納得させる返答をしろ。俺にはこの場でオメエを斬り捨てられる権利がある」
私が想像していた通りの名前。何度も何度も願った、私を助けてくれるヒーロー。
口元を歪めて言い放つその人は、まさに不遜という言葉が似合った。
国王からの剣を持つ人には、特級の裁量権が与えられているということになるんだろうか。ならば、彼は私が想像するより更にものすごい地位と権力を持っているということか。
じりじりと蛇男から距離を取りながら、この後の動き方を考える。
余計なことをしたら私に意識が向いてしまうかもしれない。とりあえずこのまま空気になっていた方が……
「こ、この者は……神殿のッ、し、神官見習い、で」
「へーえ？　このお嬢が見習いなら、半生かけて徳を積んだ大司教なんか赤ん坊だなぁ。そうか、オメエの領地じゃ見習いにエッロい格好させて鎖で繋ぐ風習があんのか……追加であと五秒やる。優しいだろ？　俺は」
剣を持っていない手がほんの僅か揺れる。人差し指が何度か曲げられて……って、これは私を呼

んでいるんだろうか。
足音を立てないように、ゆっくりと大回りして。あと少し、もう、少し。何歩か進んで、手を伸ばせば触れられる。そんな位置だった。
「ッ、待て!!」
ようやく気付いた蛇男が声を上げる。
その手が伸びてくる前に、痛いくらいに力強く何かが私を引き寄せた。
「っと、ほっせえなぁ。まぁ、こっから育てりゃいいか」
「え……」
次の瞬間にはがっしりとした腕の中にご招待。
「安心しな。お願いされた通り、助けにきてやったぜ？」
自然なウインクと低く甘い声に、脳内の叫びが一部決壊した。
（いやあああ!!　このひとすっっっっごい、好みなんですけど!!　え、なに、こんなひといていいの!?　彫りが深くて骨太で格闘家系マッチョで手も大きくて声もよくて、美形ではあるけどイケメンではなく超ド級の男前とか！　私を殺しにかかっているとしか思えないんだけど！　私この人の胸までしか身長ないし！　素敵抱いて！　あああああもう！　あまりにも場違いだから考えたくなかったのに！）
初対面の異性を見てここまでテンションが上がりまくったことはない。やばい。とにかくこの人はやばい。突き抜けて超タイプ。奇跡の男前だ。でも落ち着け私、今それどころじゃないから。

「さっさと片付けてやっからさ。後であの可愛い声、聞かせてくれよ」
駄目だ。やっぱり駄目だ。完全に落ちた。ちょろいよ私。
助けてくれただけでもほぼ百パーセント落ちるというのに、現れたのがこの理想の化身なんて。
一目惚れ否定派を卒業する日がくるなんて。
ぎりぎりで叫びを堰き止めている私は、きっと苦しそうな顔をしていたんだろう。彼が腕の力を弱めて、剥き出しの背中を落ち着かせるように撫でてくれる。
「……はぁ。お嬢、下がってな」
こくりと頷いて、解放された腕の中から名残惜しくも移動する。
ようやく状況を確認してみると、蛇男が視線をあちこちにやって泡を食った状態になっていた。
「クソ、おいっ、誰か……」
「オイオイ、その剣はマジで飾りモンか？　自分がやらかしたことくれえ、自分で幕引きやがれ」
抜身のままだった剣をもう一度構えて、彼が先程より更に低く声を吐き出す。すると蛇男は怯えたように肩を揺らした。そして腰に下げた剣の柄にゆっくりと手を置いて、抜こうとするけど、震えが酷過ぎて、それすら叶わない。俯いて何かを呟いて、弾かれたように顔を上げて、を何度も繰り返す。
何がしたいのかよくわからなくて、思わず首を傾げてしまう。
「はっ、はは……終わりだ、もう、全て……ははは……」
結局、斬られるどころか髪一本すら損なうことなく、蛇男が打ちひしがれたように膝をつく。

私を使って目の濁ったおっさん達をたくさん仲間にしていたのに、奥の手とかないのかな。もしかして呟いていたのが奥の手――魔術とか？　だったらどうして発動しないんだろう。
何にしても、もう決着がついたと思っていいのでは。
「こんだけのことしといてそれかよ……ちっとぐれえ歯向かって見せろよ」
囚われている側からしたらたまったもんじゃないようなことを言っているけど、私も同意見だ。
まさか、この監禁の日々が、こんなにもあっけなく終わるなんて……この白い牢屋から出られる日が、こんなにあっさりとやってくるなんて、思いもしなかった。
そんな時、少し遠くからややだるそうな声が乱入した。
「無理っすよ、魔封じの結界張っちゃいましたもん。団長に肉弾戦挑むとか、どんな自殺志願者っすか」
「張ったのは私ですけどね。へらへら笑ってるだけで、何も仕事をしないカスがいるので大変です。ベルリオス団長、屋敷の制圧完了いたしましたが」
蛇男の背後にある、唯一の出入り口からふたりの男が現れる。
ひとりは黒い軍服を纏い、銀髪のゆるい巻き毛をひとつに括った、いかにもチャラそうなイケメン。もうひとりは似たデザインの白い軍服を着て、黄緑色のおかっぱ頭をした眼鏡の女顔美形。どちらもキャラが濃そうな面々だ。
緊張感もなく蛇男を拘束する彼らをこっそり観察しながら、ゆっくりと息をつく。
どうやら蛇男に奥の手がなかった訳でもなさそうだ。だけど、この人達が全部封じてしまった。

魔封じとやらで魔術を使えないようにして、屋敷にいた兵を倒して制圧したと。
私のたった一言のために、一体どんな軍隊を連れてきたのか。
いや、騎士団だったか。私の想像する騎士とは違うけど、この世界ではこうなんだろう。
「チッ……だから小隊なんかいらねえっつったんだよ。あっけなさ過ぎてつまんねえ」
「完全に私用っすからねー。でも、ついてきてよかったっしょ？　人手あるといざという時楽チンじゃないっすか」
「私なんて完全にとばっちりですよ。ああもう早くフレータ団長のもとに帰還したい。屋敷の外に出たら転移してもよろしいですか」
「ぶつぶつうるせーよ眼鏡。おーい、お前ら元凶回収すんぞー」
ふたりに続きわらわらと中庭に入ってくる、黒い軍服の男達。本当に、色々と終わった後らしい。
さすがに彼にもエロいと認識される衣装で、多数の男の前に出るのは少々躊躇いがある。そう思い、私がマントを靡かせる大柄なその背中に隠れると――
「で、そこにいんのが団長を呼びつけた子っすか？」
「っ」
目ざとく私を見つけたチャラ男が、思いっきり体ごと首を傾けて顔を覗き込んできた。
あれ、この人の軍服、ちょっと飾りが少ない。助けてくれた彼の方が豪勢な感じだ。団長だからか。いや、そんな場合じゃなくて……
「おぉー美少女！　まさしく囚われの姫君って感じ――」

「見んな」
「ッガフ!!」
あ、今顔面に拳が入った。
多分手加減はしているんだろうけど、私の目から見たら何の遠慮もないように見えた。
「オメエが見ると小せえお嬢でも孕んじまう。近寄んじゃねえ」
「フゲェ……ヒ、ヒドッ！　いくらオレでも一晩ねーと無理っすよ」
「馬鹿ですか。下半身が本体なのですか。汚らわしい。神子は穢れを嫌いますからさっさと指揮に戻りなさい、このゴミが」
「お前こそさっさと地団に帰れよ陰気眼鏡。ワイバーンの上でゲロ吐いたお前の方が汚ねーっての」
「地聖魔術士団には繊細な人間が多いので、人にも騎獣にも気遣わない自分勝手な操縦についていけないのです。そもそも我々は魔術により、身ひとつで空中を自在に舞うことができますしね。ああ……汚物臭くて嫌だ」
「ふざけんな、お前のゲロがオレのマントにかかったんだろーが！」
そろそろ、このコントじみた流れを止めるべきだろうか……
「……あの」
ぴたり。まさにそう形容するのが相応しいくらい、周りの音が止んだ。
何だかよくわからないけど、とりあえずこの言い争いを聞いているのも面倒だ。やれることを

やって、さっさとどこかに落ち着きたい。
「聞きたいことが、あるんですが。いいですか？」
マントを軽く引っ張って、いつも通り吐息混じりの声でそう言う。
「……オメエら、呼ばれるまでここに入ってくんな」
「団長、そんな顔してたらさすがに無理っすよ。しょっ引かれちまうっす」
「これはこれは、ベルリオス団長は少女性愛に目覚めたのですか。清楚でたおやかな美少女がお好みとはフレータ団長もご存知ないでしょう」
「チッ……うるせえ。とにかくどっか行け馬鹿野郎ども」
「駄目っす」
「駄目です」
だから、私は面倒が嫌いなんだって。このどうでもいい言い争いとかやめてほしいんだってば。
面倒事回避、してもいいだろうか。
「……イサーク」
またぴたりと喧騒が止んだ。
ゆっくりと、マントが翻る。腰を折るようにして、目の前のその人が視線を合わせてくる。
男らしい太い眉、眇められた切れ長の目、高くしっかりとした鼻や顎に、厚い唇。危険なくらいの男の色気と甘さをたっぷりと含んだその顔立ちは、どこをとってもいい男にしか見えない。
言いたいことも、聞きたいことも色々あった。だけど、一番に言うべきことは決まっている。

「私を助けてくれて、ありがとう」
私のできる、最上の感謝をしよう。
わざわざ跪いてくれたその人に両手を差し出し、そこに銀の光を漂わせる。
今まで見てきた中でも、一等強く綺麗な光だ。私が真剣に報いたいと思っているからだろうか。
「イサーク・ガルシア・ベルリオス。言祝の神子は、これまでの行いに報いるため、あなたに祝福を与えます――願いを」
さあ、何でも言って。適当な祝福でもしっかり効果があるんだ、真剣に祈ればおそらく大抵のことだったら叶えられるはず。
地位も権力も財力もありそうなこの人が望むのは、何だろうか。
「願いは、叶ってる」
「え……」
「助けてくれたら超絶好みの女の子と出会えるようにするって、俺に言ってきたじゃねえか」
ああ、それもしっかり届いていたんだ。
雄の色気に溢れた流し目が、私を捉える。もしかしなくても、私のことを言ってくれているんだろうか。だけど残念ながら、こちらは結構な外見詐欺だ。見た目通りの性格でもないし、年齢も。
「自惚れだったらごめんなさい。私は無理ですよ」
「あぁ？　神子は純潔じゃなきゃいけねえとか、そんな法螺吹き込まれてんのか。魔の穢れはともかく、生殖は穢れじゃねえよ」

「いえ、私はとっくに純潔ではありませんが、そうではなく」
何故か周りの温度が数度下がったような気もするけど、まぁ普通にスルーで。
「この世界では、ずいぶんと小柄に見えるようですが……私は二十五歳なので、少女の域はだいぶ超えています」
「……は？」
「体は成熟していますので、もう背は伸びませんが」
数瞬の後、起こったのは大絶叫だった。

第二章

どうやら、蛇男は色々とやらかしているらしい。
「――また、非常時以外での神聖結界の使用は、大司教もしくは司教の認可が必要です。それも罪状に挙げられるのでは」
でかい男達が詰めかけて、一気に狭苦しくなった気がする中庭。
テーブルも椅子もない空間で、立ったまま残務処理をしていく三人を私は無言で観察する。雄々しい男前と、チャラいイケメンと、女顔の美形眼鏡なんてそうそうない絵面だ。
「つーことは、結界生成に関わったヤツら全員捜さなきゃなんねーのか。うっわー、どんだけいんだよ。めんどくせ」
「創った張本人である司祭、使われた魔石・聖砂・聖水・その他諸々を融通していた商人、調達に関わった傭兵や冒険者などが対象になりますね。見つけ次第捕らえましょう……そこの馬鹿面下げている馬鹿が」
「オイこら毒吐くくらいなら黙って仕事しろ眼鏡」
「ベルリオス団長のご要望によりこの男の罪を挙げているのに、どうして口を閉じられるというのですか。私の仕事は黙っていてはできないのですよ。それくらいのことを考える脳みそはないのですか」
彼がガラスのようにぶち破った結界――神聖結界というのは、なかなかにとんでもない代物だったようだ。
発動までの手順を理解する頭と、一定の神力があれば構築は可能。ただそれを維持するのに馬鹿高い費用と、かなりの神力を消費する。戦時や災害時などの非常時でない限り使わない、五聖教の神官達の虎の子らしい。
どうしてそんなものが半年以上発動できていたのかというと、簡単な話だ。私の神力で維持されていたのだ。
すっかり体力が落ちたように感じていたのは、運動不足やしたくもない祝福のせいだけではなかった。あの頭痛も結界を攻撃されていたから……って、これは言わないでおこう。攻撃した本人がここにいるし。

立ち読みサンプルはここまで